

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 85

高橋七蔵と対山館

— まいばらの先人 ⑦ —

伊吹山観光ことはじめ

滋賀県の観光は琵琶湖を中心に発展しました。明治三〇年（一八九七）頃から「近江八景めぐり」などの観光遊覧船の営業がはじまり、大正から昭和初めには、京阪神の観光客向けに豪華な大型観光船が就航しました。また、マキノスキー場には、昭和五年（一九三〇）に大津と海津を結ぶ太湖汽船の「スキー船」が就航し関西の客を誘致しました。これに対し伊吹山には、東海圏からの来山が多く、江戸時代から登られていたことなど滋賀県の観光の流れとは一線を画します。

伊吹山では、明治五年（一八七二）の修験宗廃止令などの影響で山岳信仰が急速に廃れますが、江戸時代の文化・文政期頃から盛んになってきた庶民の物見遊山に着目し、京阪神と名古屋から最も身近な名山として、

大正時代には案内料をとって登山客を誘います。山麓には旅館が経営され、大正三年（一九一四）には中山

再次郎がスキーの講習をおこない、関西初のスキー場としてその後の発展をみます。大正二年（一九一三）

にはじめてのガイドブック『伊吹山名勝記』が刊行され、このなか

には登山口の上野に伊吹旅館のほか、登山案内所、採集の案内、標

本の販売、登山記念物、土産品販売、伊吹百草湯などを掲げる店が

多数みられます。

伊吹山の植物利用

大正一四年（一九二五）に設立

された「対山館長生園」は、タイ

ル張りの百草風呂を売り物とした

旅館で、薬草や山菜の集荷、植物標本や絵葉書の生産販売、玉突きなどの娯楽施設などを経営していました。創業者の高橋七蔵は、明

治二一年（一八八八）に上野で生まれ、幼少のころから伊吹山に親しみ、草刈りや薬草採集には子どもとは思えないほどよく働いたといえます。日清戦争のあとに登山客が急増し、案内人をおかしてでてしだいに専門知識を身につけました。明治三九年（一九〇六）、坂田郡教育会が東京帝国大学の牧野富太郎を招いて植物講習会を開催したときに、牧野との生涯の交友が生まれ、牧野は対山館を定宿としました。

伊吹山文化資料館（春照）には、対山館へ宛てられた葉書や封書が保



▲ 薬草などの包装紙

存されています。これをみると、個人をはじめ漢方薬店、問屋、百貨店、製薬会社、医院、大学、国民学校などさまざまな取引先がみられ、北海道から熊本県まで二八都道府県にわたります。東京・神奈川・愛知・岐阜・滋賀・京都・大阪・兵庫には安定した取引先があり、文面から遠路見本を携えて顧客を訪ねる七蔵の姿が浮かびあがります。

扱われている商品の中心は、古くから「百草湯」「百草葉」などと呼ばれるゲンノシヨウコ、ドクダミ、トウキ、ヨモギを基本に配合された浴湯薬や健康茶、これらを粉末にした胃腸薬です。これらの主力商品以外に約二〇〇種の植物が取引されています。うち約一三〇種類は薬用植物で、種子、苗、株、標本のかたちで薬草園や薬局と取引されています。また、昭和一四年の牧野富太郎からの手紙にはトリカブトの採集にいきいたい旨と、イブキトウキの生木を根付きで五株送ってほしいという依頼が記され、伊吹山の植物が七蔵を紹介して牧野の研究に役立てられていたことがわかります。高橋七蔵は、伊吹山でおこなわれてきた草刈りや薬草採集、登山案内で蓄えた知識を観光産業に発展させました。

（歴史・文化財保護室）